分担研究報告

（6）関西地区におけるHIV陽性者相談・支援に関する研究

■ **研究分担者：**青木 理恵子（特定非営利活動法人 CHARM）
■ **研究協力者：**岳中 美江（財団法人エイズ予防財団／特定非営利活動法人 CHARM）
土居 加寿子（特定非営利活動法人 CHARM）

研究要旨

関西における陽性結果通知の現状や陽性判明時から診療の間にある課題を把握することを目的に、個別インタビューを実施し、事例としてまとめた。どのように陽性であることを知ったか、またその際の対応が、本人の疾病理解や受け止め方に一部影響を与えている可能性が伺えた。

A 研究背景と目的

HIV陽性検査結果を知る機会は医療機関、保健所、保健所以外の公的検査機関、イベント検査会、郵送および自己検査など多様化している。2007年の大阪府HIV感染者・エイズ患者届出数（大阪府感染症情報センター調べ）は合計188件で、機関別の内訳は、エイズ診療拠点病院46件、その他病院32件、診療所23件、保健所・保健福祉センター 51件、公設無料匿名検査所36件であり、医療機関からの届出が保健所等の公的無料匿名検査を上回る。また、近畿ブロック診療拠点病院である国立病院機構大阪医療センター（白阪琢磨調べ）の2007年10月末（1198名）の累計データによると、紹介元施設の内訳は、ブロック拠点病院54名、拠点病院280名、一般医療機関472名、献血26名、保健所187名、NGO･その他179名で、一般医療機関や拠点病院からの紹介が多い。これらのことから、医療機関で陽性が判明しているケースも多いことがわかる。しかしながら、特に医療機関での陽性結果通知のあり方について、またその場やその後にどのような情報や支援が得られるかについて、機関によって異なることは予想されるが具体的対応については把握が困難であり、実状は明らかではない。

そこで本調査の目的は、関西におけるHIV陽性結果通知やその後の診療や支援につながるまでの経験について聞き取り、陽性結果通知の現状や陽性判明時から診療の間にある課題を把握することとした。

陽性結果を受け取った時の経験（特に医療機関）が少しでも明らかになることで、近年検査環境や支援環境が変化しつつある中での陽性結果通知時対応の準備等にも変化があるのかどうか、また通知後の生活によい影響を与える対応とはどういったものなのかについて考える機会となり、そして支援環境の向上に役立てられると考える。また、HIV検査環境や支援環境の向上に役立つ資料として個人の経験が検査や支援に関わる人たちに還元されることも重要であると考える。

B 研究対象者と方法

調査対象者は関西で過去5年くらいにHIV陽性結果を受け取った人とした。特に、医療機関における経験について積極的に聞き取りをすることとした。対象者リクルートは、陽性者支援活動をしているグループやNPOの相談員及び派遣カウンセラー等に協力を依頼した。陽性とわかった時や診療につながるまでの内容について話すことができる人をリクルートしてもらうように依頼した。調査への協力依頼に同意を得て対象者の個別インタビューを実施し、陽性結果通知をされたときの経験やその後の受療や支援につながるまでの経験について聞き取った。実施期間は2008年9月半ばから1月半ばとし、目標数は10名前後とした。

インタビューワーは、インタビュー開始前に、趣旨、方法、個人情報保護、聞き取り内容使用や公開の方法について記載した「調査協力依頼書」を用いて対象者に説明し、インタビュー協力や録音の同意とインタビュー内容の活用について「調査協力同意書」を用いて同意を得た。調査協力は任意であり、趣旨説明時に参加拒否も可能であるが、インタビュー途中の拒否権も保障した。

インタビューワーは、インタビューガイドに基づき、本人が陽性結果を受け取った時やその後の受診までの経緯やその間の思いについて語りやすいように、必要に応じて質問し話を深める役割を担った。もしインタビュー後に支援が必要となった場合等は、利用可能な相談資源について情報提供することとした。協力者にはインタビュー終了後に謝品を渡した。

インタビュー実施後は、録音したインタビューを文書化した。文書化はすべて聞き取りをしたインタビューワーが行った。インタビューを録音した機材やインタビュー文書は、チャーム事務局内の鍵のかかる場所に保管した。事例としてまとめるにあたり、インタビュー文書を目にする研究協力者に対して、守秘義務の確認をした。個人や場所等を特定できる可能性のある情報は削除し、匿名性を保持した上で、事例としてまとめた。インタビュー内容を事例としてまとめた後は、それらのデータは破棄した。インタビュー協力依頼の際に公開前の原稿確認を希望した協力者には、文書を確認してもらった。

なお、本調査の研究計画書は研究代表者所属研究機関である特定非営利活動法人ぷれいす東京の倫理委員会の審査を受けた。

C 研究結果

協力依頼に同意が得られた11名のインタビューを実施した。協力者の基本情報を表1に示す。また、各事例の概要は以下のとおりである（事例詳細は本報告の最後を参照）。

表1．インタビュー協力者の基本情報

	年齢	性別	判明場所	判明年月
A	?	男性	医療機関	2000年10月
B	40代	男性	医療機関	2007年秋
C	30代	男性	医療機関	2006年8月
D	40代	男性	医療機関	2006年11月
E	40代	男性	医療機関	2006年8月
F	40代	男性	医療機関	2008年7月
G	30代	男性	医療機関	2006年2月
H	30代	男性	保健所	2005年7月
I	30代	男性	保健所	2006年12月
J	30代	男性	保健所	2008年9月
K	30代	男性	保健所	2008年1月

【Aさん】

体調不良から一般病院へ行き、同意なくHIV検査をされ、結果も伝えられることなく、拠点病院に紹介された。ただし、一般病院で偶然カルテが見えたため、本人は感染を確信して拠点病院に行った経緯がある。その間、何の情報もなく、体調の悪さへの対応もなく、不安な時間を過ごした。

【Bさん】

肺炎で入院中にした検査の中にHIVも含まれていて判明した。検査同意はなかった。詳しい説明はなく、死ぬことしか考えられなかったが、間違いであることを望みながら紹介された拠点病院に行った。改めて検査をして結果がわかり、詳細の説明があった。看護師に話を聞いて気持ちが変わっていった。他の陽性者とのつながりは一切なく、周囲の人とも距離を置いている。

【Cさん】

体調不良から一般病院へ行き、HIV検査の提案があり、同意をして検査をした。最初は陰性と伝えられたが、実は偽陽性だったため再度検査をすると説明され、陽性と判明した。拠点病院を紹介されたが、長く生きられない不安、親へ伝えることなど思い悩み、拠点病院に行くまではつらい思いをした。インターネットで情報検索をしながら過ごした。

【Dさん】

体調不良のため町医者に行き、肺炎の進行のため総合病院を紹介された。そこでの肺炎検査前の検査にHIVも含まれていて同意をして検査をしたところ判明した。詳しい説明は一切なく、拠点病院を紹介された。感染していたことは青天の霹靂であり、長期入院になり死ぬであろうと思いながら拠点病院に行った。想像と異なり、今後の治療方針を説明された後、帰っていいと言われたため、さじを投げられたと思った。しばらくはどうやって死ぬかなど死ぬことばかり考えていた。はっきり助かると理解したのは、一ヵ月後くらいに入院した時だった。今でも、エイズとばれないようにどのように死ねるかということをよく考える。いろんなことを背負って生きるよりも、最初わかった時に死んでいればある意味楽だったかもしれないと思う。

【Eさん】

体調不良で近所の病院に行き、胃カメラを飲んですぐに拠点病院を紹介された。拠点病院で告知をされたが、エイズだと言われ、すぐに入院しないと危ないと伝えられた。当時周りには陽性者はおらず、自分がいきなりエイズとはびっくりした。死ぬのだと覚悟が決まった。すぐに友人や親に伝え、入院した。治療は大変だったが、友人や病院スタッフの助けもあって、生きるほうに切り替わった。人にうつすかうつさないかが一番の問題で、今もセックスはしていない。汚い血が流れていると思い、まだできない。

【Fさん】

体調不良で以前から利用していた病院に行った。最初はHIVの心配を言わず、さらに体調が悪くなってから申し出て、担当の科で検査をしたところ判明した。性行為をしていたら感染してもおかしくないと思っていたため、そんなには驚かず、体調の悪さをどうにかしたいことが優先だった。すぐに入院して、いろんなスタッフと話をした。スタッフが明るいことで不安が減った。パートナーはこの病気のことに詳しく、伝えたあとも関係に変化はなかった。親にも早くから伝えてあるため、その点は楽。少し心配なのは薬を飲み始めたらどうなるかということ。

【Gさん】

近所の病院やそこから紹介された総合病院（偶然拠点病院）で他の疾患の治療を受けていたが、自らHIVの検査を希望した。しかし、しばらく受け入れてもらえず、2ヵ月経過した頃にやっと検査をしてもらって判明した。入院中に他の患者さんの前でHIVの疑いがあることを説明されたため、患者の中でも肩身の狭い思いをして過ごした。説明のないままHAARTが開始しており請求書を見て初めて知った。身体障害者手帳の説明などもなく、そのまま退院した。インターネットができる環境になって詳しいことがわかり、陽性者同士のつながりもできた。

だいぶ迷ったが、陽性者の友人の後押しもあって病院を変わった。その病院ではスタッフがケアしてくれ、手帳のことも助けてくれて今がある。しかし、全部を言えたわけではなく、全てをさらけ出せたのは陽性者の友人のみだった。

【Hさん】

体調不良で陽性者の友人に相談し検査することを決めて保健所に行った。結果受け取りまでの1週間は、陽性者のホームページにアクセスして過ごした。陽性結果を知った時は、事前に情報を入手していたこともあり、やっぱりと思った。結果の時に対応していた人たちは焦っていたように感じたが、採血のときの看護師さんの対応がよかったことが結果を受け取りに行くことに繋がったと思っている。すぐに陽性者の友人に今後の相談をした。もともと家を出たかったこともあり、親や兄弟に、今は死なない病気になったという文書をインターネットから引用しながら話をして引っ越した。通院している友人と一緒に病院に行った。

【Ｉさん】

彼女と真剣に付き合いたいと考え、保健所に検査に行った。自分にも感染する可能性があることを意識していたため、結果を知ってそんなにショックではなかった。保健所で別室に案内されたときに覚悟をした。保健所の人たちの空気の変わりようやざわめき感には傷ついた。保健所から詳細の説明はなかったが、拠点病院を紹介してもらい、その日のうちに行った。今思えば、病院が近すぎたかなと思う。当時つきあっていた人にどう伝えるかについて大変心配し、時間がかかった。先生から案内があったカウンセラーさんと当初から話をしており、いろんな話をできる人がいることはありがたい。

【Ｊさん】

性感染症がわかり医療機関に行った。そこは大変親切で治療もしてくれたが、HIV検査の案内をされなかったことを疑問に感じた。そこで、友人に検査を出来る場所を聞いて保健所を知った。しかし、建物は見つけたが、日本語が少ししかできないため、辞書を引きながら10人くらいに聞き、検査している部屋にやっとたどり着いた。セーファーセックスを心がけてはいたが、100％ではないため、ある程度のリスクはあると思っていた。英語ができるカウンセラーがいてくれたおかげで、それからはとても楽に進んだ。その人がいなかったら、次のステップをどうしてよいかわからず、大変なことになっていたと思う。健康保険の取得から、病院や医師の選択まですべてサポートしてもらえた。病院のスタッフは、忍耐強く接してくれる。ちゃんとケアしてもらえているし、必要な時に頼れる人がいることに感謝している。そうでない人もいるだろうから。

【Kさん】

自己検査キットで陽性反応が出た。本当に感染しているとは思っていなかったためびっくりして何をしていいかわからなかった。保健所などに行かなければいけないことはわかっていたが、インターネットでHIVの症状などを検索して、落ち込んだ。でも陽性者の日記のサイトを見つけて、メールを出したら、丁寧な返事が返ってきて、とりあえず保健所に行くことを決めた。電話予約をしようと、事情を伝えたら、保健所に来ても一緒だから、病院に行ってくださいと言われた。どこの病院に行ったらいいですかと聞くと、やはり検査をここでしますと言われた。予約がいっぱいですぐには行けなかった。しかもキャンセルする時は必ず連絡くださいと何度も言われた。保健所では受付の人もいい対応だったし、検査の前にカウンセラーと長く話した。検査結果については、もうショックではなく、病院に行く手順もカウンセラーと話していたので、スムーズだった。カウンセラーの存在がなかったら、そんなにすぐに病院に行けなかったと思う。

D 考察

HIV陽性と知ることになった経緯や受け止め方は様々であり、結果通知時の対応も機関によって様々であった。陽性とわかってから診療につながる時期には、個人差はあるが、死への直面、経済面、周囲へ伝えることなど、多様な課題を抱えていたことがわかった。陽性とわかる前の本人の環境、また、検査の仕方、結果通知の方法、その場面での支援のあり方などが、本人の疾病理解や受け止め方に一部影響を与えている可能性が伺えた。結果通知場面の対応の重要性が再確認されたが、対応は機関によって異なるため、必要な支援が準備され、結果通知時に支援について案内することや本人がアクセスできるような環境整備が重要であることが示された。

なお、本調査で得られた事例は陽性者を代表するものではないが、検査相談環境や支援環境向上のために活用できる資料としたい。

E 結論

関西におけるHIV陽性結果を受け取った時期の経験について、11名に個別インタビューを実施した。結果通知のあり様や、経験者の感じ方は様々であったが、陽性とわかる前のHIVのイメージや理解に加え、この時期の経験がその後の疾病理解や病気の受け止め方に何かしらの影響を与えている可能性が見受けられた。

陽性と知ってから個人が抱える課題やそれらに対する解決方法も様々であったが、医療従事者、友人、他の陽性者の支援によりこの時期の揺れと向き合う様子が伺われ、結果通知場面やその後の支援の存在が重要であることが示された。

F 発表論文等

（学会発表）

岳中美江：関西地区でHIV陽性の結果を受け取った経験者の声から、サテライトシンポジウム「HIV検査からHIV診療の間にある支援ニーズとその課題」、第22回日本エイズ学会学術集会・総会、2008年、大阪

インタビュー事例の詳細

【Aさん】

体調がすぐれなくて、通常通っていた病院に診察にいったところ、検査をいくつかされた。1週間後に来なさいということで、再度行った。栄養バランスが偏っていると言われた。他は何ですかと聞いたら、専門の病院を紹介します、と。その時点ではなんか悪い病気でももらったかなと思った。大きい病院を紹介しますというだけで、病名とかは一切言わず、とにかく紹介しますからと。なんで？　と聞いても、そんなん言ってる場合じゃないから、紹介するとこにすぐにでも行きなさいと言われた。

先生が紹介状を書いているときに、たまたまカルテが開いていた。紹介状を書くために先生の前に開いてたんやと思う。そのカルテにアルファベット3文字「HIV」とのっているのが見えた。自分に来てしまったか、という感じだった。先生は何も言わなかった。

紹介された拠点病院に行くまでの2日間は、告知はされてないけど、自分では絶対そうだと思っていた。文字をみちゃっているから。不安でしょうがなかった。どうしよう、どうしよう。もうすぐ死ぬんだと不安だった。でもとにかくしんどいし、その病院で今後の対応を教えてもらえなかったし、先生も行きなさいと言ったから、行くしかないと思った。明日すぐにでも行きなさいという感じで伝えられたので、すぐに行った。

何科ということは言われていなかったので、受付で紹介状を見せた。検査して、結果がはっきりするまでは1週間。長い説明は受けなかったし、こっちも聞こうとはしてなかった。余裕はなかったし、先生が説明してたとしても、頭に入ってなかったかも。覚えてる言葉は、はっきり「間違いなく」ということと、「これから長い付き合いになるね」。その他のことは、言われたか言われてないか覚えてない。

体調が悪かったのと、この病気がわかったことで仕事はやめた。拠点病院で結果がわかってすぐに、理由は言わずにやめた。病気によって、何か迷惑をかけたらいかんと思った。その月に収入が止まって、その後2ヵ月はお金がまだあったから診察行けた。そして家賃が払えなくなって、病院に行けなくなった。

それからが大変だった。友達のところに流れ込んで行った。それから働くまでは、お金なくて病院に行けないのがしんどかった。安定しないまま、病院行けなかったのはつらかった。どないなるんやろ、という不安は常につきまとってた。住んでるところ無くして、生活が安定してなかったことも重なって。一人でじっといるときは、不安になってた。

居候して、食べたいものもすぐ食べれないし、食べさせてはくれてたけど、仕事もせんととは言われてプレッシャーは大きかった。どのくらいか記憶が飛んでるけど、けっこう長かったと思う。1年近くは経ってたかも。数ヵ月してから仕事が見つかった。

その時は、勝手に検査されたこと云々よりか、病気のことしか頭になかった。これからどうなるんやろ、どうしたらいいんやろ…。あれ、勝手に調べられてよかったんかな？　という疑問は後からわいてきた。数年後に勝手に調べたらあかんってことがわかった。当時は知識なかった。

今となってみれば許可なしに勝手に調べられたんはしゃくにさわるけど、発症する前、悪くなる前にわかったことは、ある意味救われる。自分の場合は、今は結果的にはよかったと思えている。早くわかった分だけ、将来のことを考えられるから。不安やから検査に自分で行く気は全くなかったから。

通常は、そうじゃないかなと思って自分の意思で検査に行くことも多いのかも。自分の場合は、体調が悪かったからいつもの病院に行って、告知はされなかったけど、そうじゃないかなという感じで拠点病院に行ったわけ。いいように解釈すれば、覚悟して拠点病院に行けた。よそからしこまれて不安感が出てきて必要性を感じて行った。2日間はいちばんしんどかった。情報を得る手段はなかったし、体調が悪くてしんどかったし。

【Bさん】

まず、肺炎で入院した。検査をいろいろされて、そこの先生にHIVの反応が出てると言われた。検査の同意はなかった。そんなはずはないと思ったんだけど、もう一度調べてもらったら、そうだとわかった。そして今の病院を紹介してもらった。

伝えられた時は目の前が真っ暗だった。死ぬことしか考えてなかった。わかった恥ずかしさ、この先のなさで目の前が真っ暗になって、何も考えられない状態。でもう、死に方、どういうふうな感じで死のうか、死にたい死にたいとその気持ちばっかりだった。結果は伝えられたが、詳しい病気の説明はなかった。

まだ可能性があるかなと思った。今となったら笑えるけど、今の病院に行く前に、お祓いにも、占いにも行って、違うように違うようにって望んで祈って…結果、やっぱり陽性だった。違う意味、踏ん切りがついたかな。どのくらいの時間だったかは覚えてない。そのころ一日一日どうやって過ごしたか覚えてない。

今の病院で改めて検査をして確定した。その時にはこと細かく説明をしてもらった。主治医には悪いけど、男性に言われるより、女性の看護婦さんにすごく話を聞いてもらった。すごくはげましていただいて、そこから気持ちがだんだん変わっていった。だいぶすっきりはした。それから通院している。

ほんとなら、わからない状態で、死んでたくらい数値も低かったし、先生にも言われたけど、もう後がなかった。それが助けられたってことは、まだまだこの世で勉強しないといけないってことかなって思いかえして、生きてる間はもうちょっといろんな人に対して、自分に対してもそうだけどもっともっと勉強しないといけない。それができてないから、まだ、あの世には行かせてもらえないのかなと思った。病気とわからずに生きていたころよりも、精神的にも強くなったかな。少々なにかあっても耐えれるくらいにはなった。

心許せる人が、女性なんですけど、一人だけいる。その人には話してる。その人の友達に同じ病気の方が実はいたって聞いてる。お会いさせていただこうかとも思うけど、今さら会ってどうかなって。まだ会ってない。もうその時は誰かにすがりつきたい、こういう病気の人を近場で見たことないし、その人の話を聞きたいなと思ったけど、今は思わない。

普通の友達とか知り合いに言うと、拒否されるとか、汚いものを扱われるように接せられるのが怖いのでちょっと言えない。たぶん、自分もこういう病気になってなかったとして、HIVの人がもしいたとしたら、そばに行くのも怖いかな。触れるだけでもうつるんじゃないかとか思うんじゃないかな。病気わかってから、だいぶ今では変わったけど、あんまり人に触れることはない。ある程度の距離はとる。食べる物でも同じ箸は使わない。感染しないことはわかってるけど。

今となってはありがたかったかなと思ってる。でも今後自分と同じような病気の人が出てくると思うんですけど、やっぱ先生の一言によって命を落としてしまったりする人もいると思う。だから、先生の言葉はかなり重要度が高い。一言一言が。重すぎず、軽すぎず、話を進めていってもらった方が、今後の人のためにはなると思う。重く話されると、この病気が重たく、重たいんですけども、行き場がなくなってしまう。半分笑い飛ばしてくれるくらいのほう

がいい。

わかってから結婚した。相手の女性は知ってるんだけど、その代り性生活は全くない。先生は避妊をしていれば大丈夫とおっしゃるんだけど、自分自身が無理。相手にはわかってもらってはいるけど、今となっては結婚しなかったらよかったかなと思う。自分が相手に対して悪いなっていう罪の意識もある。相手も相手で、そのときはよかったとしても先々はしんどくなるかもだし。信じれないわけじゃないけど、もし別れた時に、相手の親に自分の病気のことを話されたりする不安はある。

精神的にはちょっとは強くなったつもりなんだけど、家庭の中でもしんどい。わかってくれてる反面、でもなってみないとわかんないでしょっていうところがどっかにある。

これからそういう人がでてきても、がんばって生きてほしいなと思います。

【Cさん】

発熱があって、熱が下がらないということで病院に行った。家にいても下がらないので「念のために入院をして様子を見ましょう」だったんだけど入院しても原因がわからない。熱も下がらない。で、いろんな病気の検査をした。病院の内科の先生は、原因がわからない、おかしいとだいぶ悩まれて、発熱から2週間たったころ、最終的に内科の先生から「エイズの検査をしましょうか」ということになった。その時に両親がいたかは覚えていないが、両親に隠し事をしない家なので念のためエイズの検査をするかしたかということを伝えた。

両親も一緒に検査結果を聞いた。エイズの事だけではなく今までの経過を説明するというものだった。エイズの検査もしましたということも含めて。エイズの検査結果もマイナスと告げられた。あ、やっぱりね、ほっとした、と思ったのもつかの間、熱も下がっていた数日後に「マイナスと告げたのですが、実は偽陽性だったので、陽性の可能性もあるので、もう一度採血をして精密に検査をしたい」と言われた。

え、マイナスっていったじゃん、と思った。また不安がよぎってきて、夢であってくれと思った。採血をした。正式にプラスだったと聞いたのは、いつだったかな…。たしか外来診察室で、やっぱりプラスでしたと言われたような気がする。そこでいろいろ数値を言われたけど頭真っ白でよく覚えていない。反応があるということを言われたので、頭真っ白ですね。

気にはなってたけど、まさか自分がというのもあったし、無謀な性行為はしていなかったつもりだったので、コンドームもできるだけつけるようにしてたし。来てしまったかという感じ。拠点病院への紹介状を書いてもらう間、待合室で待ってたけど、数年後に死ぬんだろうなとかいろいろ考えた。ゲイであることを隠してるので、親にどう言おうというのも一番出てきた。なんで感染したかという説明がつかないから。

拠点病院へ行くまでの間いろいろと考えた。あまりこの病気について知らなかったので、長く生きられないというイメージしかないので不安だった。両親より先に死んでしまうのか、姉を残して死んでしまうのか…などずっと悩んでた。自分が最後でないといけないと思っているし、死ねないのにどうしようと思った。それでも、病院に行かなきゃほかに方法はないと思った。行く日まではつらかった。病院に行くまで、家のパソコンであちらこちら検索して調べた。情報の中にはさらに不安になるものもあったけど、ずっと検索してた。

すぐに行って下さいということだったので、1～2週間後くらいに紹介状を持って拠点病院に行った。行ったら、先生に最初に「とにかく定期的に病院に来てください。それだけは守ってください」と言われた。「来ないと命の保証はできないから」と。「来てくれればちゃんとしますから、様子をきちんと見ていけば大丈夫ですから」と言われた。「来ないというのは絶対やめてください、そうすると私たちには何にもできなくなりますから」と。「はい、ちゃん

と来ます」と言った。死なないって先生がおっしゃったので、命に関する心配はその病院に行ってから消えた。カウンセラーさんにも話を聞いてもらった。

最初の病院も一生懸命してくだったので、不信感を持っているわけではないけど、今考えればなんでそんなことがおきたんやろってのは思う。その時は頭がいっぱいで、どうしようこれからってのが先だった。なんでそうなったのかは、今でもわからない。今の生活に影響しているということも感じない。

積極的に検査をしようと思ってしたわけではないけど、HIVがわかったのは自然な流れだったと思う。原因が不明だったので、最終的にHIV検査をすることになったのは、あーそれもありかもしれないなと思えた。告知を受けた病院のそばはしばらくは通りたくはなかった。思い出したくない…。1年くらいそういう時期があった。

【Dさん】

微熱が続いて、普通の風邪と思ってたけど1ヵ月たっても治らないし、胸が息苦しくなってきて、もしかしたら肺炎になってるかもと思って町医者に行った。肺炎でちょっと進んでいるから肺炎専門の総合病院に行った方が良いと言われた。総合病院で肺炎を調べる検査の前に検査をすることになり、それで感染がわかった。

その時は、HIVを含む何種類かやりますという説明があり、自分も了解した。自分で疑いがあったら、前もって検査に行ってたと思うんですけど、全く思ってないんで、感染しているというより発症している状態で本当に驚いた。総合病院で症状を見て発症していると言われた。でも専門医ではないので、拠点病院に行った方がいいというので、紹介状とレントゲンを持って翌日に行った。

総合病院では、詳しい説明は全くなく、こういう専門病院があるから紹介状書くから早く行きなさいと。たぶんそのお医者さんも知識がなかったと思うんです。お医者さんは告知するときに緊張されてたのがよくわかった。たぶんお医者さん自身が驚かれたと思う。客観的に、この先生は初めてなんだろうなって思った。そこは僕も冷静にお医者さんの顔は見てましたけどね。先生の表情をはっきりと覚えてる。

青天の霹靂というか、例えば2億円の宝くじが当たったというのの逆の衝撃。覚えているのは、病院出た後に空見上げましたね。青空でしたけどね。空は澄んでたけど自分の心は落ち込んでいるという。なんでかな、と。全然疑っていなかったんで。あの時は全然知識ないんで、混乱してて、もちろんショックで頭真っ白なんですけど、病院から家に帰った道順をはっきり覚えているんです。冷静に。その時思ったことは、明日病院に行かないといけない。たぶん帰れない。亡くなるんだろう。かなりの日数入院しなきゃいけない。お金がいるだろう。だから、銀行でお金おろさないといけない。銀行寄りましたよ。その晩は寝れなかった。いろいろ考えました。どうなるのか、親はどうなるのか、自分のこれまでの人生とかね。

次の日の初診は長時間診て下さった。僕はもちろん死ぬと思ってるから、即入院で、もう帰れないと思ってたんですけど、治療方針を示されて、こういう薬をどういうふうに飲んで下さいといろんな指示を言われて、じゃあ、帰って来週来て下さいと。これびっくりしたんですね。わかんなかったんです、そこでは、助かるとは。どちらかというと、助かるというよりも、さじを投げられたと思った。総合病院の先生はごっつ緊張されてて治療方針もわかんない。今の病院に行ったら治療方針をたんたんと示されて、また来週来てねという感じ。お医者さんの対応が全く違う。だから、7、8割は投げられたかなと思った。

家でいろいろ考えるわけですよ。こっちは死ぬ覚悟で、来年の桜は見れるのかなって感じなのに、帰りなさいと言われたんで。どういう意

味やったんやろと考えていましたね。その翌日くらいから、体重が急に減り始めたんですよ。自分が衰弱してるのがわかる。足の裏の脂肪がなくなって、骨が当たるのがわかるくらい。それで驚いてすごく進んでると思って、3日後にまた病院に行った。1週間後まで待てませんと言った。顔も変わっちゃうんですよね。自分の死相というか、こういう顔になると死ぬんやなと鏡見てましたけど。

1ヵ月後くらいに入院した時に、今、日本で亡くなる人数を聞いたんですよ。その説明をしてくれて、もうひとつ言われたんは、今発症したからあなたは助かった。5年前やったら危なかったかも。10年前やったら亡くなってたやろうと。それまで徐々に助かりそうとわかってきたけど、はっきりわかったのはその時。わかってかなり安心した。いろいろ考えましたけど。もし死んだ時、エイズで死んだとわかれば大変でしょう。親、兄弟、仕事とか、いろんなとこに関わるかなと。病院で死んでしまったらわかるから、その前にどうにかしなければとか。死ぬことばっかり考えてたんかなあ。病院では嫌だなあ、エイズで死ぬのは嫌だなあ、それまでに他の死に方ないかなあと。何か他の人に迷惑かからない方法、血液飛び散らないような。そういうマイナス思考、そういうんばっかりですよね。1週間くらいは、告知されてからそんなことばかり。

生きることだけじゃなくて、同じくらい死ぬこともめっちゃ考えますよ。どういった死に方をするか。どうやって死んでいってるんかな、他の人は。ある意味では逆にこの病気になって生きてしまったから考えてしまう。こんなこと言うと怒られるかもしれないけど、もしかして発症した時死んでたほうが、こんなこと考えなくてもよかったかもしれないし。そのほうが楽やったかもしれない。あと生きるほうが辛い、長いし。いろんなこと背負って生きないといけない。言えないしね、この病気は。隠さないといけないし、知られないように。考えることが増えたなというのはありますね。

なんとか飢え死にしないで生きればいいかな。なんとか働いて、あと病院に来れるようにとか、最低限の経済力は必要なので、そのために生きないといけない。大きい夢があって、ごっつい邁進しないととかは今はないですね。悲しいけど。ポジティブな生き方ではないけど。仕事は以前とほとんど同じようにやってます。続くといいんですけど。続いて、ある日突然死ぬ、それが一番の願いです。それがね、簡単に死ねたらいいんですけどね。死については、抽象的には考えてたんですけどね。今は、すぐじゃないことはわかったけども、病気する前とは全然違いますよね。

一番不安なんは、誰が知ってるかわかんないこと。役所でも誰が僕の書類を受け付けて、誰がやって下さってるのかわかんないし。いらっしゃいません？　安楽死を国にお願いしたいとか、尊厳死とかいう話。エイズを1回発症すると元に戻らないと思ってましたからね。うまくいくと、今では発症しないように、もしくは発症してても改善できるという知識はないですよね、一般に。

【Eさん】

毎日しんどくなって、ごはんが喉を通らなくなってきた。ずっとがまんしてたんですよ。お医者さん嫌いやし。まさか自分がエイズだとは思わなくて、近所の胃腸科の病院に行って、胃カメラ飲んだら、やばいと言われたんですよ。すぐに大きい病院を紹介するから明日行ってと言われたんで、行った。最初に会った先生に、死ぬよって言われたんですよ、まず。入院しないと死ぬよって。レントゲンの写真を見た瞬間にエイズやって言われましたね。がーんと来ました。明日は無理ですから明後日にと言ったのは覚えてます。

先生もわかってはるんで、血液検査をする前にエイズやって言わはったんです。でもいちお血液検査するけども、必ず陽性は出るからと言

われた。すぐ採血して、まさしくそうやった。2時間くらいたって、病院から友達に電話して、そのときにはもうすぐ逝くんやって落ち着いてましたね。

実は何回か検査やってて、大丈夫や思ってたんですけど。それから8年ほどたって、いきなりエイズです。僕同性愛者なんで、いちお、漠然とはわかってたんですよ。でも周りにはその当時いなくて、まさか自分がなるとは。いつかはなるかもしれないとは思ってたけど、いきなりエイズとはびっくりしました。死ぬなって思ったんで、すぐに覚悟が決まりました。

入院しないといけないんで、家に帰って、まず友達みんなに電話したんです。僕エイズやから、先逝くわって言って、そしたら集まってくれて。僕一人ずつに遺書書いたんですよ。そして家を掃除しだした。もう帰ってこないと思ったんですよね。友達に鍵を渡して、病院に行った。親にもすぐ電話しました。先逝くわって。エイズやって説明した。

主治医の先生が危ないとはっきり言ってくれた。でもひとつだけ方法がある、食べる事やと。食べれないんですよ、痛くて。でも、それから必死になりました。流動食みたいな飲むやつがあって、それは毎日飲みました。ごはんも通るようになって、だんだん調子よくなってきたんですよ。だから、自分が生きようとしたからかなって。

なんでわしが死なないかんって感じになってて。友達に、もう死ぬわって言ってたら、なんでここに入院したかわかるか、病気治すために入院したんやって言われたんですね。それでぱっと切り替わったみたい。看護師さんも、一緒に勉強しましょうみたいな感じ。僕がけっこうあっけらかんとしゃべるから先生も聞いてくれるし。薬剤師さんも一から説明してくれて、カウンセラーさんにも会って、一緒にがんばりましょうみたいな。もっと閉鎖的なんかなと思ってたけど、すごく恵まれてるなって。

最初発症してた病気を治すことから開始した。きつい点滴で、すごく副作用が出て、めまいがして起きれない。ぼろぼろやったんですけど、それからひゅーと戻ってきました。1ヵ月くらいしてからHIVの薬を始めた。一番最初の薬が合わなくて、次のに変えたら、合って、今もそれで続けてる。今は3ヵ月に1回通院してる。当面1ヵ月に1回だったのが、1年後くらいからそうなった。もうそのときの感覚を忘れてるんですよね。忘れたらあかんのですけどね。よっぽどやったんですけど…。友達が聞いてくれてたんですよ。五分五分やって言ってたって、今聞くと。

変わりましたね。すごい自分に投資してますよ。毎月血液検査してるけど、楽しいんですよね。人より健康ですよね。ある意味。なったらあかんかったけど、なってもよかったこともあるかなって。すごく長生きできるって言われますね、先生に。

今が一番怖いですね。障害者認定されてるけども、働けへんようになったらどうするんやろかとかね。もし薬飲まれへんようになったらどうなるんやろとか。でもあまり深くは考えないようにしてるんですけどね。仕事も普通の仕事と一緒ですから。

あとは僕の今からの行動やと思います。人にうつすかうつさないか。これは一番大問題と思うんですよ。だから僕この何年もエッチしてないんです。できないんです。ちょっとトラウマになりましてね。汚い血が流れてると思ってしまうんですよ。先生からやってるかって言われるんですけどね。人生これで終わっちゃう人もいるじゃないですか。今んとこは僕は無理ですね。紙一重ですよね、ああいうのって。昔はよく死んでたじゃないですか、有名人とか。今は、成人病みたいなとこがあって。でも成人病はうつらないじゃないですか。僕らのはうつるから、そこが一番問題やなって思います。

すごい感謝してますね。人が変わったように。友達がものすごく助けてくれたんですよ。中には友達にも言えない子もおるやろうし、僕は恵

まれてるなって思いました。

僕ね、これ性病や思ってるんですよ、このHIVって。ある意味はずかしいじゃないですか。性病でもすごい恐ろしい性病みたいな感じで。でも、国が補助してくれるって。自分が払っている金額と、実際かかっている金額を聞いたことがあって、補助がなかったら払われへん額。この先恩返しせなって思ってます。ええかっこじゃなしに。せっかく生きれたから、いつかわかんないけど、何かの形でお返しできたらなって、心の片隅にずっとあります。

【Fさん】

月1回ペースで風邪の症状が出てた。最終的にそれが3日間くらい続いて、その間、過去に梅毒になった時とよく似た症状が出た。おかしいなと思いながら今の病院に行った。最初は内科に行ったので、ちょっとわからなかったみたい。その日は過去のことを言わずに帰った。そういう行為もしてるんで、梅毒か、もっといえばひょっとしたらと思ってた。でもそれはずっとありました。やっぱり切っても切れないもんなので。

仕事も行ってたんですけど、立ってるのがしんどくて、もう1回病院に行って、内科で過去の梅毒と今回の症状が良く似てるということを伝え、そっちのほうの数値はどうでしょうかという話をした。担当の科で、血液採ってもらったら、こうであろうという結果が出たんです。採血したその日にたぶんそうであろう、もう少し詳しく検査して数値がどのくらいになってるかというのはもう少し日にちがかかると言われた。その日に入院してくださいと言われた。

今やから言えるのかもしれないけど、そんな別に驚きませんでした。あーなっちゃってんなーみたいな感じ。パートナーは結構注意して性行為してる子なんで、しきりに「なっても知らんよ」って言ってました。僕的には性行為をしてたらなってもおかしくないと思ってた。ショックよりも、このしんどさを先にどうにかしてほしいという感じ。入院ってなったときに、なんか気持ちがすーっと引いてね、なんか一時的に熱も下がった。しんどさが引いて、その日は入院の用意のために帰って、次の日から入院した。しばらくはしんどかったかな。入院して楽だった。1ヵ月半入院してた。

入院中に病気の説明があった。カウンセラーや看護師さん、いろんな方が話をしてくれた。さらに退院後に看護師さんに話聞いた。いっぱいいろんなことがあるじゃないですか。でもこれからのことも含まれるので、まだ経験してないことを聞いちゃうと考えすぎるといけないんじゃないかと思って、あまり深くは聞かなかった。資料の中で、今注意せなあかんのだけ線引いて、なんかあったら病院と思ってたらいいと言ってくれたんで。

スタッフのみなさん明るいですよね。入院したときにすぐそれを感じました。だから、知ってる部分での話だと思うんですけど、やっぱり不安にはならなかったですよね。逆に、不安にさせない言い方をしてはる部分もあるのかもしれませんけど。先生は、薬飲むのは3年後かも5年後かもしれないけど、そのころになったら新しい薬がどんどん出るかもしれないんで、普通に健康の人よりも寿命が長くなるかも知れん。薬は飲み続けなあかんけどって。

看護師さんもお医者さんも言ってたのは、世間のあれがあるんで、仕事もすぐやめたりする人もいるけど、別に公表しないかんことじゃないって。僕はその点楽。家族もみんな早い時期から知ってるんで。僕の説明不足かもしれませんけど、イコール早く死ぬという考えを持ってたみたいだけど、今はそういうこともないって理解してるみたい。一般に売られてる本とか読んでたり、僕の知らん事まで知ってたりする。仕事場には言ってないですけどね。仕事場の人はまだ理解がね。

お話を最初聞いたときに、こういうことも注意しなあかんねやっていう、内容的なことで不安はあったのはあったけど、これからどうした

らいいんやろっていうすごいかんじではなかった。知らなかったことも多いですけど、相方がけっこう詳しい。そのへんでも、僕は付き合い的にも楽は楽ですよね。相方も知ってるけど、何も変りなく。周りの友達とかがどういう風に見るかということで、気にしはる人も多いんじゃないかな。

今ちょっと心配することは、薬を飲み始めたらどうなるかということ。それは入院の時に説明もあったんですけど、薬飲むときに入院する人もいるんですって。「そんな大変なんですか」って言ったら、今回よりも苦しむ人もいるって言われた。「そんなん言わんといて下さい、僕はどうでしょうかね」って聞いたら、「たぶんくるわ、前の時にあれだけしんどさが出てるから」って。「早いとこ来とき。来たらええやん、また」って。家にいといてまたしんどくなったらあれやし。また飲み始めたらどうなるかわからないし。でもいつ飲むかもわからへんのに、飲んでからのことを考えてもあれなんで、今は、始めた時、何もない人もいるって。そうなりたいなあって。その時期については見てくれてはるんで、そのへんは安心なんで。後は、他にいらん病気をもらわんように、注意しなあかんかなって。だからって遊びませんとは僕は言ってないんです。先生もそれは言いませんよって。

ずっとつきあっていかなあかん病気なんで。そういうことをせーへんかったらって、それは絶対無理なことなんでね。なった人も、そういうとこに出入りしてるじゃないですか。そういう人のことを批判する人もいる。じゃあ、自分がなったら出入りせーへんのかっていったら、しないって言うと僕は思うんですよ。なってへんからってそういうことを言う人もいるから。その人の気持ちになって話しはらへん人もいるしね。

【Gさん】

友人がインフルエンザになって、食べ物を届けたりしているうちに、自分にもうつってしまった。高熱が出始めたので、インフルエンザの薬をもらわないかんと思って、近くの病院にいった。インフルエンザの薬を飲んでも治らず、薬を変えても高熱が2週間たってもひかなかった。そのうちにリンパがパンパンに腫れてきた。

個人病院の先生もこれは風邪とかじゃないなと、「○○症」を疑って、町の一番大きな総合病院であるC病院に紹介された。（たまたま拠点病院だった）行ったらそこでもおそらく「○○症」ということで、その治療をするため入院になった。治療開始して1～2週間たっても改善せず、その時点で1ヵ月は経過してた。

2人の先生が「○○症」と言ったし、自分もそれだと思ってたんだけど、症状がよくならず悪くなって行く。自分でもHIVに関して心当たりがあったので、治療の合間合間に検査して下さいと言っていた。でも聞き入れてもらえず、治療がそのまま続き、治らないのでまた別の病気を疑って薬が変わった。そうこうしているうちに2ヵ月たった。

自分はふらふらで、もう1回、HIVの検査をしてくださいと先生に頼んだ。それまでにも研修医の先生が変わるたび、そして部長にも数回HIVの検査を頼んでいたんやけど、また自分の希望にはつながらず、医者のいうことは絶対という雰囲気でそれ以上は言えなかった。医者は上で患者は下という環境やね。言うとおりにやっとけばどうにかなるかなと思いながらも、頭の片隅にはHIVの心配があった。そのうち研修医が変わったので、その人に、「もう耐えられへん、なんにもよくならないから、先生から主治医の先生にHIVの検査の話をしてもらえないか」とお願いした。やっとHIVの検査をやれることになった。

確認検査の結果は判定保留になった。ここでやっと先生らのチームとしても疑い始めた。でも…主治医でもありHIVも診ているという先生は、「HIVっていうのはね、これは大変なことですよ」とHIVの疑いがあるということを4人部屋でしはじめた。病院の患者社会の中で、あ

の子は…ということが知れ渡ってしまった。喫煙所でも鼻つまみ状態になってしまった。居場所はないけど、ここは拠点病院っていう説明を受けてるし、自分はここでないともう生きのびられへんのやというんがあったから、他の機関にアクセスするとか知らなかったし、この先生とうまくやっていかないと生きていけないと思っちゃって、HIV外来をたまたまやっていたこの先生の言うことになんでもYESという環境ができてしまった。

患者同士のコミュニケーションも今までのようにとれなくなって、余計に行き場のない感じになって、どうしようもない中に自分の身を置くしかなかった。仲良くしてもらってた他の患者からもぷいっとされ、はみごみたいな感じになってた。それでも自分に非があると思ってたから、そのときは。そんなんされてもしょうがないと思ってた。聞こうと思ったら4人部屋でされちゃうから聞きたいこともちゃんと聞けず、ということが2ヵ月目以降も続いた。

判定保留から2週間後に陽性結果ということがわかったくらいの時点で、知らないうちにHAART開始してた。説明は全くなかったので、他の薬もあったし抗生物質だと思ってた。そういうことも聞けないの。4人部屋で言われちゃうし、お医者さんが怖くてしょうがなかったから。

気づいたのが、請求が来たとき。3週間しめで病院にお金払いに行くんやけど、その時にこれまでと桁が変わってて ん。「何でこんな高いんですか？　払えません」って看護師さんに言った。「こんなに高いのは、HIVやん？　エイズやん？　そういう薬は1錠につき数百円するの、それを3〜4錠飲んでるから、かけるいくらでかける日数でこの金額になる」って説明を受けた。

え？　じゃ、これからどうしたらいいの？　て思って、「でもこれ払えないですけど、どうしたらいいんですか」と言ったら、ソーシャルワーカーに相談することになった。ソーシャルワーカーの院内での立場的なことがあったみたいで、福祉的なことは相談にのれるけど、院内で困ってることに関してはタッチできないと言われた。高額療養費の説明を受けた。HIVの治療をしてる人は、日々どうやってこの高額な医療費を負担しているのかと思ったけど、この制度を利用して、毎月6万なりというお金をどうにか工面していかなあかんねんなって思った。でも、少なからずそういう行為をしたんやからなって。そのまま退院して、帰った。

退院してインターネットができる環境になった。手帳の制度があること、拠点病院のこと、ソーシャルワーカーの役割、HIV外来をやっている先生はどういう知識を持って患者に対応するものか研修されているものであることもわかった。そしてある方から「患者は病院も先生も選んでいいの」と言われた。そこで初めて、そうなんやと思って、いちからネットで調べ始めた。

制度を利用していく上で、まず手帳を取ることをやればいいのねと思った。今までの経緯も知ってるから、しばらくは今の病院で手帳を作る作業をやってもらいましょと思い、予約して病院に行った。そしたら主治医に、「あ〜そうでしたね、手帳ってものがありましたね。うちで手帳の申請をすると1級がとれますよ」と言われた。後でわかってんけど、自分をひきとめようとしたのは、先生の事情があったみたい。

あほやから、級の違いもわからんままに、しばらくここでお世話にならなあかんねんなってとこに戻って行った。その手続きをするためにソーシャルワーカーに、こういう制度があるんですよって説明して、手帳申請の書類を取り寄せてもらい、先生に書いてもらおうってときに、「もう治療はじめてるよね、数値も上がってるから、3級もとれないよ」ということになって、主治医も混乱した状態になり、自分だって余計どうしたらいいんですか？　ってなった。でもやっぱりどうにかしたいから、いくつかのとこに相談した。「病院を変えなさい」「あなたはな

んも悪くない」と言ってくれた。

その時点で気力もなくなってて、もうしんどいわってなってたし、でもどうにかせなっていう気持ちもあったし、どうしたらいいのか悩んだ。陽性者同士の横のつながりもできてきて、個人がやってる掲示板を通して知り合ったDさんにも、偶然同じような経験をした人だったこともあり、病院を変えるように言われた。でも、主治医に病院変わるっていうのも言わないといけないんでしょって思った。

Dさんは、スタッフも充実してるし、先生もたくさんいて選べるE拠点病院をすすめてくれ、「自分も一緒に行った方がよければ、その気になったらいつでも言って、無理にはいわへんけど」て言ってくれてた。ほんとに感謝してる。E拠点病院に行きにくい理由が別にあったんだけど、どうにかしなきゃいけないってことで、Dさんの後押しもあって、C拠点病院に電話をした。

主治医に、家族には病気のことを言ってないこと、家族への配慮のために、地域にある病院よりも遠くの病院に通ったほうがいいと思っているため、今までお世話になり申し訳ないけど紹介状を書いて欲しいことをていねいに伝えた。「うちにストックされているHIVの薬は不要在庫になるんですけどね」と言われて、「買いとります」と言った。紹介状を書いてもらい、E拠点病院に行った。陽性とわかってから3ヵ月半くらい経ってた。

一番最初に紹介状を見せてもらって話をしたのが看護師さん。「本人の強い希望があったので入院中にHAARTの治療を開始しました」と書いてあるのを見て、そこでうわーって泣いて、今までの話を聞いてもらった。HIVを受け入れるってことの前に、医療機関やお医者さんや看護師さんを含め、信じられへんと言った。そうやなって聞いてくれた。そのあとにワーカーさんにも話を聞いてもらって、先生にも考えてもらって最終的に手帳はとれる方向でどうにかするから、自分でそうやって考えるのはやめとき、考えすぎて余計しんどくなるのはあかんからといろんなスタッフがケアしてくれた。それで今の自分があるわけ。

E拠点病院に行っても、どうにかしたいということだけを言って、100全部は言わなかった。C拠点病院で経験したことも全部は言わなかった。医療者同士のつながりがあるんだろうから、あまり悪いことはいったらいけないと思ってたし、信用はできなかった。いろんなスタッフがいて、必要なことは聞ける。そういう意味では信用してる。でも今でも100は言ってない。唯一100の気持ちを100言えたのはDさんだけだった。さらけだして全部言った。

他の人よりも病院、医療、医療者に対して不信感は持ってる。それは深い。ものすごく人を見る。でも、今とても感謝してるのは、その後2回した入院期間中に出会った担当になった研修医。どういう道を通ってきたか、C病院での話も聞こうとしてくれて、患者としてだけでなく人としての付き合いをしてくれた。その部分でその先生に心を開くことができた。その先生の存在は今でも大きくて、ひとつの自分のキーだった。

Dさんに出会って、E拠点病院につながることができた。お医者は怖くて半分くらいしか話せなかった。たまたま入院することがあってその先生との出会いがあって、人として患者をみてくれてる先生もいるんやってことがわかった。それが大きかった。

【Hさん】

微熱が続いたので、陽性の友達に言ったら、受けたほうがいいんちがうかということで、その月のうちに保健所に検査を受けに行った。わりとさくっと行った。初めての検査だった。

結果を待っている間にけっこうネットサーフィンをした。ゲイ・ポジのサイトのチャットにたどりついた。毎日同じ時間帯に入るようにして、チャットをした。

結果を1週間後に聞きに行った。精神的には

あっけらかんと。やっぱしというかんじ。受ける前に情報を仕入れていたこともあり、特に頭真っ白とかもなく、淡々と話してはんなーみたいなかんじ。対応してた人たちが焦ってたかんじだったのと、こっちの個室にって言われた時点でやっぱしなーって。自分のイメージとしては部屋に入って封筒を開けてはじめて結果がわかると思ってた。結果は自分が一番に知ると思ってたから、結果を自分の前に知られてるんやという印象。採血の看護師が対応よかった。印象がよかった。それが結果を聞きに行くことにつながった。

結果をもらった後、その日に陽性の友達に電話した。（前出の友達）これからどうしようかという話をした。この人は家族を知ってるから、家族の性格もある程度わかってる。たぶん手帳取るってなったら家を出てって言われそうとか、一人暮らししたら・・とか、を話した。自分の中ではある程度決めていた。とりあえず、家出ましょって思って決めてすぐに行動に移した。

その日のうちに、兄にまずポジであることを話したら、好きなようにし、と。おかんがどう言ったって親子の縁は切れへん、と。最初は悲しむかもだけど、きっと理解するときくるよ、と。この言葉が後押しになった。母も兄もゲイであることは知っていた。

サイトから「今はすぐ死ぬ病気じゃなく、治療もあるし生きれます」というとこを抜粋し、それを見せながら母と他の兄弟に話した。今後手帳を取るとかの話になったら、家出たほうがいいし、と話をした。友達のとこに行くと説明した。そうしてくれるなら、そのほうがありがたいと母は言った。

友人宅に落ち着いてすぐに、すでに通院してるその子の通院日に一緒に病院に行った。

サポートがあったので、悩んだりとかは全然なかった。落ち込んだりもしてない。病気に関しては。自業自得でしゃーないと思ってる。相手も知らんとうつしてる場合もあるし。自分の中でその頃セックスはストレス発散やったし、体調悪くなったから検査に行ったけど、その前にもセックスはしてるし。

もともと家を出たかった。ポジとわかったことを理由にして家を出れるということで、これで楽になれると思った。

【Ｉさん】

当時はつきあってた彼女がいて、結婚が見え隠れする関係になってきて、真摯につきあいたいと思い出した。検査を促す広報があり、大丈夫だろうとなにげない気持ちで検査に行った。そして判明した。保健所で受検した名前を言ったら保健所内の人達の空気が変わって、別室にとなった時に覚悟をした感じ。

ある程度の心づもりはあって検査を受けるわけですから、そんなにかしこまられても…。僕のほうがたんたんとしていた。普通にセックスしていればうつるもんなんだろうなという意識はあったから、そういう意味ではそんなにショックなことはなかった。

保健所の方から、「よければ病院を紹介しますよ」と言われたが、具体的に今からどうなるかの説明はなかった。今思えば、自発的に検査に行く人にとっては、医者のとこ行って、数値の様子で薬の開始になるみたいなフローチャートのようなのが簡単にあればまた違ってたかも。

病院はその日の午後に行った。なってるんやから、行かなあかんもんやったら、はよ行っとけと。連絡入れといてもらって、すぐ行った。行ってから、ちょっと近いとこきすぎたかなとか。もし近所の人に、「どないしたん」って言われたらって。時間をあけてしまうと尻ごみしてしまう部分とかあると思うから、勢いで行ったのはよかったかな。

病院では、先生からこれからこうなっていくと説明を受けた。覚えてるのは、「いくらかかっていくんですか」って聞いた。当面かかる費用について回答してくれた。

惚れてた人に対して、どう申し開きをするかっていう部分。どこかセックスなんだろうけど、それによる感染者の人らってみんなそうやと思うんですけど、自業自得ってことがついてまわってて、誰もなりたくてセックスしてるわけやないんやけど、日本人て性に対して秘め事というか。あまり日常生活に出てこない部分を相手に伝えるということはものすごくナーバスになりますね。

そっちの心配でだいぶ暇かかりました。カウンセラーの方とそんな話ばっかりですよ。先生からカウンセラー制度の案内があって、わかってすぐの時期からお会いしている。人に話すのもはばかっちゃうんですけど、話ながら自分で答えをというか、落ち着いていくためにも大事なんだなって思います。ビジネスライクな制度で、垣根の違う人間で病院でしかお会いしないんですけど、人には言えない話や世間話も含めてあれこれできるというのはありがたいですね。

結果的には別れてしまったんですけど。セックスが絡む性病は他にもあるけど、第一に治せないってことで特別な何かがあるんやろうと思う。死ぬような病気でなくなってきているとは言いつつもどこかに不治の部分が何かひっかかるんでしょうね。普通にセックスすることでうつったりうつしてしまう、それが理解しにくいんですよ。知らずにしてしまうというのがすごくなんかね、キーワードっぽい感じしますね。それが出てくると、後付けみたいに惚れた腫れた好きだ嫌いだっていうのも塗りつぶされてしまったりするから。

保健所の方も、あのどよめきや空気の変わり方は、あの人達自身も絵空事というか他人事なんですね。身近にあるもんではなくて、一般の人と同じ意識の人が働いてる感じ。結果渡す際には個室で渡すようにすればシステマチックになって、ささいな空気の変化が本人に見えずに済む。だってあの空気の変わりよう、中にいた人達が、来たでって構えるざわめき感が、やっぱ僕今思いだしたら傷ついたかな。僕自身はどこかそれで遠慮がちになったり。検査させたいくせに、したい人間に対してはそんなに優しくないんだなって。ごくごく自然に人を好きになって、その人とまじめに向き合いたいなって思った結果、検査に向かった。そういう気持ちまで、陽性だったという結果によって塗りつぶされてしまうという寂しさや空しさは感じますね。こういう検査の方法や仕組だと。

あくまでいろんな病気の人が行く病院でしょ。HIVと察されるという可能性はないのかなと思う。なってるもん同士ですら、待合で居合わせてる時、あの人もそうなんやろかって働いてしまうくらいナーバスな問題、そういう病気でもあるってことなんやと思う。でも、どの病気も同じやねんとビジネスライクにしてくれてるほうがかえって優しいのかもって思うこともあるんです。

周りの環境とかそういうのがわかってきたのが、ここ半年。時間っていうのは残酷なようでもあり、建設的なんですね、少しずつ自分の見えてることが広がって行く。そういうことを言えるだけいい環境なのかもしれないなとも思ってます。

人って必ず死ぬということがあるけど、若いうちは見えてないでしょ。それがふと見えるきっかけになった。それが見えるのは人によってまちまちやと。僕の場合は、この時だった。それだけのことかなと。

この病気が理由で別れるということがなければもっとみんないいんだろうな。それがセックスしてうつるもんやったら、キスしたら虫歯うつるやろうし、一緒に住めば水虫うつるやろうし、どこで線引きするかってことだと思うんですけど。自分の立場だけで見るんじゃなく、少し広く見れるようになった。もっと広がって行くでしょうし。そういう意味では、病気なんて関係ないんだなって、その人の在り方かなって。

【Ｊさん】

First I went to a clinic, because I went traveling and I came back with a STD. Clinic was very professional, and well run, people were very kind, and understanding regarding the disease I had and giving me a right medicine for that. But it was king of strange because they never mentioned anything about HIV. They never suggested that I should be tested. They didn't talk to me at all about my over all sexual activity or what I might be at risk of having, or different things that I should be tested for. All they did was ask about my symptoms, and when I explained my symptoms, they thought it was gonorrhea and tested for gonorrhea, and they treated it. So, it was very strange for me because they only treated and spoke about one symptom not the over all picture. The clinic was very busy, but I think they tried very hard to make me comfortable.

I am not sure why I didn't press them about testing for HIV and other things. I think I was expecting to be asked and told to test for other things. I don't know if I thought maybe I didn't need to worry about because the doctor didn't say anything about it, and if it was a concern he would have said something, or if I thought, well maybe he was testing for gonorrhea and maybe he might from that be able to have some indication that I don't need to worry about HIV, or probably I was a little bit nervous about it, too. The clinic, while they were friendly, they were busy, and you are not spending a lot of time with the doctor. So, maybe I felt a little pressure by the time, but then I realized, thinking about it more, I should be tested for especially HIV, the serious one.

I asked a gay friend, he had some information on hand about free testing. So I went to a Ward office. Once I got there, it was not very easy to figure out where to go for a foreigner not speaking Japanese. The first few steps, I thought, oh no, I am totally alone, there's no English, this is really going to be a big trouble. None of the signs were in English, so I had to ask people every step along the way, maybe 10 people. I was trying to ask them in Japanese, trying to use my dictionary to find some words about it without having to tell them exactly what it was. So it was very difficult finding the room. And finally I found it. A little bit of the paper work was in English so that helped, but no explanation was available in English. And I took the test, and I came back a week later. I thought that there was a decent possibility that I might be positive because it had been a while since I had been tested and I had done some risky things in a mean time. Considering, while I had been trying to be safe, I hadn't been 100% safe, I thought there was some risk I might have.

I've never seen any country where the guys are so unconcerned with safe sex as Japan. So, I think things in Japan are quite risky and that being risky more often than most country where people are more insistent about safe sex stuff.

And they told me that I had it. It was wonderful that A san was there, that changed the whole experience for me. Without having her there I think it would have been totally different. She was immediately being able to give me advice to help me regarding medical care, insurance, resources that are available to me, in English. Because of that everything

since then has been very easy. I can't imagine what I would have done without having her there. At the time, I had just changed jobs, so I didn't have any medical insurance. She helped me get set up for the Japanese national insurance, which I don't know how anybody could do that without a Japanese helper who has a lot of time to help them several times, because it's a long process of paper work. It's all in Japanese, none of the workers there speak English. If without A san, it would have really been hard. She helped direct me to my choice of hospitals and doctors who specialize in HIV, she was able to tell me about the doctors, great information, extremely helpful in my choice of hospitals.

So I ended up going to B hospital. They are very helpful and nice. Not a lot of people speak English there, but a few speak a little, and they certainly try to speak and try to help me, and they are very patient. I chose Dr. C because he is younger, more available, his English is very good, and I think I chose very well with him or I got lucky. He is easy to talk to, very knowledgeable, he spends a lot of time with me, and he is not in hurry when I go in there. So I got tests for the CD4 account and viral load, and they are still ok and not needing medicine yet, so that's good. The hospital is kind of difficult to use in terms of being big, having a lot of paper work, having to go to lot of different places in the hospital, to pay, to get your next appointment, to get your medicine, to get your test…so it can be a bit confusing but people there really try hard to help me and that's good because I need the help, there's no way I could figure it out on my own.

I feel very fortunate with how my situation ended up. I think I am very well taken care of and I have people I can go to for help and questions who really go above and beyond to do everything they can to help me, but I can see how if somebody else was no so lucky, it would be very very difficult system to work in. So, now I go to Dr. C every 2 or 3 months. I am little bit worried about potential costs of my treatment as it moves forward, but so far it's been ok. I have been able to afford it. I sometimes wonder about how Japanese treatment and knowledge of HIV compared to my home, and if I might be better off being in home country, and I guess I don't really know. From my experience here, I feel like I am getting a very high level of care.

Finding out that I had HIV is obviously very depressing and sad, and very very bad news to receive, but for some reason, I don't think I took it as hard as most people probably do, I think I've always thought that there was a risk that I was going to get HIV in my life. I almost always felt like eventually I was going to get it. Even though I was most of the time trying to be safe, I've had a lot of boy friends, and my boyfriends had lot of boyfriends, and I'm not always safe, usually, but not always, so I think I always thought there was a good chance that I would get it at some point. I also read a lot about HIV in recent years it doesn't sound so serious to me. Now they have drugs to treat it, so I never thought, oh I'm going to die, I always thought of it as a treatable disease. It's going to be difficult, because the drugs are expensive, the drugs have side effects, so that's not something positive, that's something bad, but I never had any sense of that I'm going to die. I think in my country, gay cul ture is very out, and so you hear

about it and you are exposed to a lot of people who have been HIV positive for 20-25 years. And you see them and they all look fine and they are happy, they are doing their normal life. It's certainly not a good thing to have to be on medication and dealing with side effects …but for the most part, people seem fine. So I guess I was pretty knowledgeable about that, and I wasn't that afraid of it. Really in a way I almost felt a little bit relieved to know because it's always something that you are king of worrying about it and trying to do safe sex and concerned with it and thinking I need to be tested, it's something to worry about, so in a way it feels like Ok I know. Also for me I've never expected that I'm going to be somebody that is going to live a long time because many of my family members died at fairly young ages. I'm not that worried about it health wise.

The part of it that worries me, and stresses me out, bothers me, and makes me depressed sometimes is difficulty and complication it adds to my love life in getting boyfriends, my ability to get a long term relationship. That is a big concern to me. You need to be up front with anybody who is a sexual partner of yours, and tell them you are HIV positive or you should. A lot of people don't take that news well and they don't want to have anything to do with you once they find that out. Or you have to make sure that you are practicing totally safe sex with them if you are not to tell them. And then you feel bad, because you feel like you should be telling them. Then it's particularly hard in Japan where people are very careless about safe sex and then really insisting on the safe sex causes problems that people don't want to have safe sex, people don't understand why you are so concerned with it. So certainly it's difficult and it's a complication when you are just hooking up with people. But then to actually have a serious boyfriend that's a whole another level of complication because off course with someone you are serious with you have to tell them about it, and then maybe they are going to leave you, if they are somebody that you didn't tell them about it to start with, they will be upset that you didn't tell them about it in the beginning. So, especially in Japan where people don't know as much about HIV, I think they are more likely to be really afraid of it and afraid of you, and want to say bye-bye and never see you again. I think in my country where people know more about and it's discussed a lot, especially in gay community, I think you are more likely to find people that would say that's OK, let's just make sure we have safe sex, or they are positive too, or whatever, but I think here the chances are almost 100% the person is going to be really freaked out. So that's a big concern. Doctor told me, he didn't think I got this recently. He thinks it's been a while. So, I could have infected people here without knowing. I think about trying to talk to these different guys I've slept with where it wasn't safe and telling them about it, but I can't imagine any way that would work out well. I know it's probably the responsible, appropriate, right thing to do to let them know so they can be tested, but I know they are going to freak out and they are going to probably tell everybody, and you know the gay community in Osaka is small. So I think if I were to contact people and tell them about this, my gay social life in Osaka is over. It's very scary.

Without the help with A san, I probably would have known that I need to go to a hospital and would have started to try to figure out where I go, but probably would have taken me a long time to figure it out, especially since I wouldn’t want to be telling people about my HIV status very much. So I think maybe it would have taken me many many months or maybe I would have given up, I don't know. I mean I think I understand that it's a serious health problem, so I would know, but if I tried and tried and couldn't find the right place or had bad experience with some part of it, maybe I wouldn't have made it there. Or maybe I would have felt like I need to go home.

Having A san and doctor, those people can give me support, but I haven't told anyone in my life at all. No one. It's hard sometimes, sometimes I'd like to talk to someone about how I'm feeling, but I think it would cause more problems to have people know than problems that causes of just handling it by myself.

People think HIV is so serious and it's a death sentence. There's so much fear about it that makes people afraid to test and afraid to talk about it, and afraid to disclose their HIV status. I think it's kind of like the education is making it worse because so much of the education tries to portrait it as this is so scary and so bad you have to be safe and you have to use condoms. I think if they were just more realistic about it and said it's a health problem and it's treatable. If people realized it's not that big of a deal as it used to be, maybe people would get tested more because they would think oh I just should know so if I need the medicine I can make sure that I am taking the medicine. Because people are not so scared about other STDs because they think they're treatable. Lot of the stuff just seems like, they try to make it a lot more scary than it is. And it is not that scary, you know.

（Ｊさん要約）

性感染症を診てもらうため医療機関に行った。そこは大変親切で治療もしてくれたが、HIV検査などの案内をされなかったことに疑問に感じた。そこで、友人に検査を出来る場所を聞いて保健所を知った。建物は見つけたが、英語のサインなどは無く、何処に行くといいのかわからなかったため、不安になった。辞書を引きながら10人くらいに聞き、検査している部屋にやっとたどり着いた。英語の資料がありそれはよかったが、説明は得られなかった。セーファーセックスを心がけてはいたが、100％ではないため、ある程度のリスクはあると思っていた。

1週間後に結果を知った。その場に英語ができるカウンセラーがいてくれたおかげで、それからはとても楽に進んだ。仕事が変わってちょうど切れていた健康保険の取得から、専門病院や医師の選択まですべてサポートしてもらえた。その人がいなかったら、次のステップをどうしてよいかわからず、大変なことになっていたと思う。病院にもたどりついていなかったかもしれないし、国へ帰らざるを得なかったかもしれない。

病院のスタッフは、忍耐強く接してくれる。医師は、知識豊富で、しっかりと時間をとってくれる。ちゃんとケアしてもらえているし、必要な時に頼れる人がいることに感謝している。そうでない人もいるだろうから。

陽性とわかったことは、もちろん悲しく、悪い知らせだったが、他の人ほどではなかったかもしれない。感染する可能性があることをいつも感じていたし、情報も得ていて、治療が可能で死ぬ病気ではないと知っていた。自分の国で

は、ゲイ文化は隠れたものではないし、20〜25年HIVとともに生きている人にも日常的に接する。薬を飲み続け、副作用に悩まされることはいいことではないが、それでも彼らは日常を楽しんでいた。だから、自分もあまり恐れてはいなかったのだと思う。

ある意味、これまでいつも気にしながらの生活をしていたため、感染がわかったことで逆にその心配から開放された感もある。健康面ではそんなに心配していない。より心配なのは、パートナーを探すときや、長期的な関係へ与える困難さや複雑さについて。病気を伝える必要があると思っているが、この国では伝えると去っていくだろうし、最初から伝えないで後で言うと問題になる。

これまでの性的相手に伝えて検査に行ってもらいたいが、大阪のゲイコミュニティーは小さいため、それをすると自分のゲイライフは終わると思い、怖い。誰にもこのことは伝えていない。気持ちを誰かに話したいこともあるが、病気のことを伝えて問題になるよりも、自分一人で問題を抱えるほうがまだいい。

HIVは一般的にとても大変で死の宣告だと思われている。とても恐れられているため、みんな、検査をすること、話をすること、陽性であることを伝えることを怖がる。怖くて悪いものだから、コンドームを使いなさいという教育がされているのも影響しているのではないかと思う。事実以上に怖いものとされているのではないか、そんなに怖いものではないのに。

【Kさん】

前月にやばいセックスしてるなというのがあって、そこからネットでHIVを調べて、その前もやばいんちゃうかと思った。今回出なくても再度できるようにと思って検査キットを2個買った。

届いた翌日にやったら、5秒くらいで結果が出た。うわって。感染してると思ってなかったし、体調も悪くなかったんで、びっくりして何していいかわからなくて。保健所とかに行かなあかんのやろなというのはわかってたんですけど、インターネットでとりあえずHIVの症状などを探し出して、けっこう落ち込んでた。

その時に陽性者のサイトを見つけた。いろんな人が書いてて、メールが出せるようになっていたので、メールを何人かに出したんですよ。今日検査をしてこういう結果が出ましたって。2人が丁寧な返事をくれて、ホンマに不安だった時に、まさに神様みたいな感じでホントにありがたかった。とりあえず保健所行こうってことになった。

数日後に保健所に電話をしたら、いっぱいって言われた。予約制だった。電話かけるときにだいぶ迷ったんです、自宅で検査したら陽性と出たと言うか言わないか。でも電話予約をする段階で言った。そしたら保健所の人に、うちに来てもらっても結果は一緒やから病院に行って下さいって言われた。電話するのにも2日かかったんですよ、実は。だから、えっと思って、どこの病院に行くんですかって聞いたら、やり方が違うんでやっぱり検査をここでしますって。混んでたみたいで、予約は数週間後になった。電話を切るときに、キャンセルする時は必ず連絡下さいって何回も言われた。それがけっこう嫌やったんですよ。保健所でこんな対応なんかなと。

保健所では、受付の人はすごいいい感じの人やった。ちゃっちゃっと事務的にこなしてくれはって。検査する前にカウンセラーさんと別室で40分くらいしゃべった。検査で分かってると全部話した。検査結果を知るよりも、とりあえず前に進みたかったんで、それを説明したんです。そしたら、この県の拠点病院とか、CD4がこうやったら治療になるとか、説明してくれた。

それから検査をしてしばらく待ったら、やっぱり陽性でしたって。最初の40分の中で、ある程度2人で病院行く日とかも話してたんですよ。その時点では腹をくくってたし、もう3週

間たった頃だったんで。今まで大きな病院なんか行ったことなかったんで、カウンセラーさんが一緒に行ってくれることになった。それはすごく心強くて、ぜひってお願いした。

2週間後、ちゃんとした結果を伝えるって言われてたんで、結果後にその日を決めた。その時にカウンセラーさんが、県の電話相談窓口を教えてくれ、この間なんか不安なことがあればいつでも電話して下さいって。自分でいろいろ調べて電話をしたら、丁寧に対応してくれた。

自分はHIV っていうのを他人に言ったのは、そのカウンセラーが初めてだったんですよね。抵抗はもちろんあったんですけど、それを当たり前のように、気を遣うわけでもないし、それはすごい楽でしたよね。最終的な結果は所長さんから説明されて、初めて会ったのに、あなたはすごい調べて来られてるらしいですね、とてもいいことやって言ってくれた。それを継続しながら、決して死ぬ病気ではないからちゃんとした治療をして、ぱっとみる限りではそんなにひどい状況にはなってへんと思う、だから早めに病院行って下さいって。ただ抵抗があったのは、本名、住所全部書かなあきませんやん、保健所で。抵抗してたんですけど、じゃないと紹介状が書けへん、紹介状なしで病院に行ってもらうことになりますけどいいですかって言われたんです。

病院では、カウンセラーさんも診察も一緒に入ってくれて、その後は別室で診察後にどうしたらいいかなどすべて教えてくれた。それから毎回来てくれる。病院に一人で行くことになってたら、そんなにすぐには行けてないと思う。地元だから余計に。曜日も仕事の都合とかを考えて決めた。そんな感じでカウンセラーさんは命綱みたいな感じ。今は当たり前っていったら失礼ですけど、生活の一部みたいなもの。あの人がいてくれなかったら。

やっぱりずっと落ち込んでて、しばらく誰とも会いたくない時期があった。出るっていうのが嫌やった。カウンセラーさんが、そろそろ気分転換に出て行ったらってずっと押してくれてた。その時にＳＮＳに入り、いろんな人に会って、初めてわかった時にメールをくれた人にもそこで会えてうれしかった。そこで会った友達ともかなり仲よくしてる。

保健所で検査できるって知ってた。自己検査したのは、わかった時のショックが軽いと思ったんやと思う。他人から陽性って言われるよりも。どっちも一緒やったんですけどね、結局。でも早くわかる。でもそれはいい悪いありますね。何がいいかはわからんけど。わかった時の相手に対しての防御というか。感染を知ってしまうと、やっぱりセックスできないんですよ。僕それ以来できないんですよ。怖くて。ほんまに、あの気持ちをもう他の人には味あわせたくない。もういいやん、僕だけでっていうくらい衝撃やったんで。

自分の部屋行って、一人でいると気が狂いそうになるんで居間に行って、でもおふくろの顔みると申し訳ないって、ほんでまた部屋行って。もうどこにいたらいいんやって。でもひとつね、この病気になってよかったって美化もしませんけど、よかった部分も確かにあるんですよね。人の優しさ、ほんまに人は一人では生きていけないんだなって、これわかったことなんですよ。あとHIVとわかったことも、ある意味よかったと思ってる。わからんままだったら、今でも知らんまま遊んでたと思うんで、誰かにうつしてた可能性もあるってこと。だからある意味よかった。

人に対して優しくなった。おふくろとかに対しても。だから、全部が全部悪いことばかりではないと思いますよ。これからしんどいこともあるかもわからんけど、僕の場合は自業自得なんですよね。だからそれは覚悟はしてますし、嫌やって言ったらそれまでですしね。やっぱりわかってたんですよ。セーフじゃないやり方だったらうつる可能性あるってのは。でもHIVの人間がこの世の中にこんだけいるっていう認識が甘かった。HIVの人は体にぶつぶつがあ

る、痩せてるとか勝手な思い込みで、この人は大丈夫っていう勝手な判断でしてましたから。甘いっていうか無知すぎる。情報見えてるんだけど、全く見えてなかった。また置いてるわって資料も見えてた。手にとって読むとか一切なかった、なってたら怖いってのもあったから。検査会もやってるの知ってたけど、怖くて行けなかった。

知ってからは、この距離でしゃべったらうつるんじゃないか、自分の口つけた箸を鍋に入れて、他の人が食べて大丈夫か、タオルも自分が使ったのをおふくろが洗って大丈夫かとか。わかってるんだけど、もしかしたら僕のHIVがうつるかもしれない。うつしてしまったらどうしよ、そこだけなんですよ。この病気が大変な病気だから。治らないから。お医者さんは糖尿病の患者と思ったらいいと言ってくれるけど、そんなもんじゃないんですよ。だから、そのリスクを負わせたくないし、誰にも負って欲しくない。人間には寿命がありますし、死んでいくのはしゃーないんですけど、HIVになったからこの薬が使えないから寿命が縮まるとかね。HIV自体は寿命全うしたとしても、いろんな制約が出て来てしまう。僕は覚悟してますけど、それは僕だけでいい。

でもまだ一年ですからね、これから薬も飲んでいかなあかんやろうし、どんな生活になるかなるかもわからへんし、とりあえず今はこのまま行こかなっていうのが僕の考え。

以上